二〇一八年度

千葉県公立高校入試問題（前期）

五〇分
一〇〇点

（注）解答する際に字数制限がある場合には、句読点や「　」などの符号も字数に数えること。

一　これから、中学校の創立五十周年記念式典に向けて、作った詩を朗読する宮田さんと、友人の山崎さんが会話をする場面と、それに関連した問いを四問放送します。詩は次に印刷されています。よく聞いて、それぞれの問いに答えなさい。

（放送が流れます。）

「宮田さんの詩」

僕たちの桜

桜の木よ
僕たちが生まれるはるか昔から
この場所に立ち続けてきたんだね

桜の木よ
来る年も来る年も中学生を迎えてくれた
優しさの花びらで

桜の木よ
うれしい時や楽しい時

見守ってくれたね　僕たちの笑顔を
寄り添ってくれたね　僕たちの涙に

桜の木よ
さびしい時や悲しい時

これからも
枝を伸ばし花を咲かせて
応援しておくれ
僕たちの向上を

(1)　(問いを放送します。)

[選択肢]

ア　親しい仲間に呼びかけるように、全てを明るく元気な声で読んでいる。

イ　木の枝の先まで声が届くように、だんだん声を大きくして読んでいる。

ウ　気持ちの高ぶりを表すように、少しずつ読む速度を上げて読んでいる。

エ　さまざまな思いを語りかけるように、抑揚を明らかにして読んでいる。

(2)　(問いを放送します。)

[選択肢]

ア　桜の木が、創立当時から中学校の象徴になっていること。

イ　桜の木が、満開の花を咲かせて新入生を迎えていること。

ウ　桜の木が、常に生徒たちの学校生活とともにあったこと。

エ　桜の木が、中学生の努力する姿を励まし導いていくこと。

(3)　(問いを放送します。)

(4)　(問いを放送します。)

[選択肢]

ア　この詩のある言葉について、記念式典の厳かな雰囲気に合う、あらたまった表現を提案している。

イ　この詩のある言葉について、詩を聞く人に意味や意図が伝わるように、別の言葉を提案している。

ウ　この詩のある言葉について、詩の内容を多面的な視点から捉えながら、複数の例を提案している。

エ　この詩のある言葉について、強調部分を明確にするために、用語を吟味することを提案している。

二

次の(1)～(4)の――の漢字の読みを、ひらがなで書きなさい。

(1) 詳しい状況を尋ねる。
(2) 緑の芝生は市民の憩いの場だ。
(3) 作品の巧拙は問わない。
(4) これはあくまでも暫定的な計画である。

三

次の(1)～(5)の――のカタカナの部分を漢字に直して、楷書で書きなさい。

(1) 彼は調査隊をヒキいて北極点を目指した。
(2) ケワしい山道を登る。
(3) 飛行機のモケイを作る。
(4) セツビの整った体育館で練習する。
(5) 簡単にできると思っていても、ユダンタイテキだ。

二(1)	二(2)	二(3)	二(4)
しい	い		

三(1)	三(2)	三(3)	三(4)	三(5)
いて	しい			

四 次の文章は、高校生の松本さんに対して、中学生の島田さんと山内さんが、高校進学に向けての心構えなどについてインタビューしている様子です。これを読み、あとの(1)～(4)の問いに答えなさい。

島田さん　学習面で、大切にしていたことはありますか。

松本さん　それは、三つありますね。毎日の授業をきちんと受けることと、得意科目も不得意科目もバランスよく学習すること、そして、わずかな時間も有効に使うことです。

山内さん　「毎日の授業をきちんと受ける」ということですが、何か心がけていたことはありますか。

松本さん　特に心がけていたことは、授業に積極的に参加するために、予習や復習にしっかり<u>A 取り組みました</u>。

山内さん　勉強していて、くじけそうになったときは、どのようにして乗り越えたのですか。

松本さん　学習面では、難しい問題があっても、あきらめずに、先生や友だちに何度も質問するようにしました。また、気持ちの面では、秋の体育祭のときにクラスメートと撮っ<u>B た</u>写真を見て、やる気を奮い立たせてきました。

島田さん　最後に、志望校を選ぶときのアドバイスをお願いします。

松本さん　高校を選ぶための資料は、担任の先生から、たくさん<u>C もらいました</u>が、やはり自分で足を運び、確かめるのがいいですね。文化祭などに行くと、高校の雰囲気などがよくわかると思います。

山内さん　まさに、[D]ということわざのとおりですね。

(1)　文章中の<u>A 取り組みました</u>を、特に心がけていたことはとの関係が適切になるように書き改めなさい。

(2) 文章中の B たと同じ意味で使われているものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　空にかかった虹の美しさに見とれる。
イ　たった今家を出たと電話で連絡する。
ウ　昨日見た番組について友だちと語る。
エ　風景が描かれたカレンダーをかざる。

(3) 文章中の C もらいました を適切な謙譲語に直して、一文節で書きなさい。

(4) 文章中の D に入ることわざとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　百聞は一見にしかず　　イ　目は口ほどにものを言う
ウ　木を見て森を見ず　　エ　人のふり見て我がふり直せ

五

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

最近、日本語の「語彙」がとても減ってきているのだそうだ。

もともと日本語というのは語彙が豊富な言語で、同じ意味のことでも、さまざまな言葉や言い回しがあり、その中のどれを使うかによって、いろいろなことが想像できるような仕組みになっている。たとえば「自分自身」を指す言葉ひとつとっても「わたし」「わたくし」「あたし」、あるいは「僕」「俺」「わし」「自分」、変わったところでは「おいら」「こちとら」とさまざまである。

そして、相手がどのように自分を言うかによって、性別や年齢、生活環境などが何となくわかる。私たちは無意識の中で、そのような多様な言葉を見聞きしながら、実は言葉のニュアンスを感じて、言葉以上のものを推理したり想像したりしているわけである。

ところが冒頭で述べたように、最近はこのA特徴的だった日本語の語彙の豊かさが、薄れ始めているというのである。

例を挙げてみる。「怒られる」という言葉がある。この言葉に類するものには「叱られる」「雷を落とされる」「お目玉を食(く)らう」「小言を言われる」「諭される」「戒められる」「諫(いさ)められる」などがある。

けれどもこの、B「人さまから叱責される」ことを指すさまざまな語彙の中で、今、現実の会話の中に残っているのは、ほとんど「怒られる」という言い回しだけである。

女子高校生が駅のホームで、「私、昨日の夜さあ、親に諫められちゃったー！」などと言っている光景に出会ったことなど、まずないはずである。

言葉としては、「戒められる」も「小言を言われる」も残ってはいるだろうが、現実的にはほとんど使われない。つまりそれらは死語になりつつあるのだ。

丁寧に言い回しを比べてみると、それぞれにはやはり違ったニュアンスがある。「小言」と「諭(さとし)」は明らかに説教内容が違うだろうし、「お目玉を食らう」のと「諫められる」のでは説教の重さが違うし、「怒られた」のと「叱られた」のでは非の度合いが違うだろう。けれども、それらのニュアンスの異なる言い回しはほとんど、「怒られる」一つに統一されてしまった。

つまり言葉を使う側も、言葉を受け止める側も、ニュアンスの差を考慮することがなくなってしまったのである。

これはほんの一つの例だが、豊富な語彙が一つ二つの言い回しに統一される現象は、多くの言葉に見られることなのである。

それがどうした、大した問題ではないだろう……とお思いかもしれないが、実はそうでもない。語彙の減少は、[C]の鈍化につながっているからである。

先日、若い人と映画を見た。終わってからお茶を飲み、見てきたばかりの映画の話になったのだが、若者が「よかったですね」と言ったので、私は別に深い意味はなく、「どこがよかった?」と尋ねてみた。すると若者は驚いた顔をして「どこがって……」と口ごもるのである。辛（かろ）うじて「映像がきれいでー」とか「音楽がよくってー」という感想は述べてくれたが、それ以上の感想はない。終（しま）いには「そんな、責めないでくださいよおー」と不機嫌な顔で言い返されてしまった。

単に表面的に「よかった」とするだけで、どこがどんなふうによかったか、心の奥深くで感じることなく、また感じたとしても言語化することができないようなのだ。

これは若者に限ったことではない。四十代の私の友人も、私から借りていった本を返してくれたとき、「よかったわあ」と言ったので、「どこがよかった?」と聞いてみた。すると彼女も「どこがって……」と口ごもるのだ。それでも私がしつこく尋ねると、最後には、「泣けたのよ。とにかくよかったの！　いいじゃないの、よかったんだから……」と怒り出す始末。私は苦笑して、そして考え込んだ。

他人事ではない。自分のこととして考えてみても、何かの本を読んだ後、映画を見た後、芝居を見た後、音楽を聴いた後、私はその感動を深く掘り下げて感じ、言語化しているだろうか。やはり映画を一緒に見た若者のように、あるいは本を貸した友人のように、単に「よかった！」で終わらせてしまっていないだろうか。

急に恐ろしくなった。「よかった」「面白かった」で、すべてを片づけ、それ以上の掘り下げをしない……というのは、説教の種類を何でもかんでも「怒られた」で済ませてしまうのと似ている。

私たちはつまり、日々押し寄せる膨大な量の新しい情報の波をかぶり、それらを処理することのみに追われながら、人間の感性や思考を育む部分では、大幅な手抜きをして生活しているのである。確かに情報には強い人間になるかもしれない。けれども、一人の人間としての感受性や思考能力は、どんどん衰えてゆきはしないだろうか。日本語の語彙が減少してきているという事実は、私たちの感性がいか

に鈍くなってきたかを表している。

心の時代とか、心の豊かさという言葉をよく耳にするが、それらは社会が与えてくれるものではなく、結局、私たち自身が心の中に手を突っ込んで、(注)糠床（ぬかどこ）をかき回すようにしてD自分を鍛えない限り、手に入らないし身につかないものだと私は思う。

（神津十月（こうづかんな）「あなたの弱さは幸せの力になる」より。なお、一部表記を省略したところがある。）

（注）　糠床＝米糠に塩などを混ぜ、野菜などを漬け込むためのもの。

(1)　文章中にA特徴的だった日本語の語彙の豊かさとあるが、日本語の語彙の豊かさについて、筆者はどのような特徴があると考えているか。最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　自分自身を表す言葉が時代や生活環境を問わず多く存在するという特徴。
イ　同様の意味や主旨をもつが、ニュアンスの異なる言葉が多いという特徴。
ウ　性別や年齢などの違いを表すための語彙が、豊富に存在するという特徴。
エ　一つの言葉が、場面や状況に応じた多様なニュアンスをもつという特徴。

□

(2)　文章中にB「人さまから叱責される」ことを指すさまざまな語彙の中で、今、現実の会話の中に残っているのは、ほとんど「怒られる」という言い回しだけであるとあるが、この例からわかることを説明した次の文の□に入る言葉を、文章中から**十二字**で**抜き出して**書きなさい。

私たちが言葉を使う際に、□ことを怠っているということ。

□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□

(3) 文章中の［C］に入る言葉として最も適当なものを、文章中から**抜き出して**、**漢字三字**で書きなさい。

(4) 文章中にD自分を鍛えない限りとあるが、筆者が述べる「自分を鍛える」ということについてまとめた次の文の［Ⅰ］、［Ⅱ］に入る言葉を書きなさい。ただし、［Ⅰ］は文章中から**抜き出して六字**で書き、［Ⅱ］は「心」、「言葉」という言葉を使って**十五字以内**で書くこと。

自分が得た感動を、「よかった」「面白かった」などの言葉で済ませてしまうような［Ⅰ］をせず、［Ⅱ］ことを繰り返すことが大切である。

(5) この文章についての説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　客観的な事実に基づいて意見を述べ、筆者が感じた疑問点を段階的に整理している。
イ　普遍的な問題について、読者に身近な例を挙げながら、多様な解決策を示している。
ウ　誰もが感じる疑問をテーマにして、その疑問に答えていく形で文章をまとめている。
エ　筆者が感じている問題点について、具体例の提示を通じて読者に注意を促している。

六　次の文章を読み、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

> 世継ぎに決まっていた徳川光國（みつくに）は、命にかかわる恐ろしい伝染病だった疱瘡（ほうそう）に罹（かか）り、家族から隔離されてしまう。そのような中、世継ぎ話が光國から兄の頼重（よりしげ）（幼名竹丸（たけまる））に傾くかに思われた。光國は兄に強い対抗心を抱いていたが、兄は光國のもとをたびたび訪れ、いろいろな話をする。ある日、兄の話の中で、大人たちの心をも読める兄の力量に驚き、感銘を受ける。

（すごいな）

闘病生活で弱り切っているせいか、これまでになく素直に感心した。さんざん投げられたり竹刀で叩（たた）かれたりする以上の衝撃だった。

何より、

（竹の字に負けるものか）

という、いつもの競争心を刺激されなかった。「竹」は徳川家においては長子(注1)を意味する。初代家康（いえやす）の幼名がそうだったからだ。家光（いえみつ）も家康と同じ、竹千代（たけちよ）の幼名を与えられている。家光の、「生まれながらの将軍」という誇りの根源たる名である。

光國にとっては、兄のこの名を聞くだけで、

（おれが世子(注2)（せいし）だぞ）

Aむやみと背に火を付けられたような焦（あせ）りを感じさせられるのが常だった。これもまた、父・頼房（よりふさ）がもたらした混乱の種だ。父はたいてい光國を幼名の「お長（ちょう）」と呼ぶ。そして「長」もまた一般的に長子を連想させる。まるで世子が二人いるかのような扱いだった。

そういう焦慮と混乱が、綺麗（きれい）に消えていた。すっかり心が変質してしまったようだった。意識して自分を焚（た）きつけねば、それまでのように兄の存在に対して激しい憤（いきどお）りを感じられなくなっていた。

兄はそんな光國の心情を知ってか知らずか、ほぼ毎日、顔を見に来てくれた。そのたびに家の様子を事細かに話し、［　B　］。

ひと月ほどして喉の痛みが治まり、がらがら声で喋（しゃべ）ることができるようになった頃、やっと兄について理解できていた。兄は病気に倒

れた者の孤独をよく知っているのだ。

自身も疱瘡に罹り、全快までに一年半余も費やしたのだから当然である。そのとき兄が抱いたであろう孤独が光國にも理解できる。いや、弟たちの誰一人として見舞いに来なかったのだ。光國以上の、凍えるような寂しさの中で、死病と闘っていたはずだった。

ひどく申し訳なかった。死に損ないなんて思ってごめんなさい。もらった犬人形（注3）に向かってだけは、［C］そう謝れた。だが兄に対して直接口にすることはなかった。これまで抱いてきた激しい思いとあまりに違いすぎて、どうしていいかわからなかった。

代わりに、手や顔の発疹（はっしん）が次々にかさぶたになって剝がれるようになったある日、

「D稽古をしようよ」

小さな声で言った。あまりに声が掠（かす）れて小さすぎた。だから聞こえていないと思った。だが手拭いを絞っていた兄は、ひょいと振り返って、にこりと笑った。

「元気になったらな」

途端に、ぱっと光國の中で花でも咲いたような明るさが湧いた。二度と（注4）稽古はやらないと改めて言われると思っていた。無性に嬉（うれ）しかった。答えを聞いた後で胸がどきどきした。

ふいに兄が真顔になり、

「その前に、覚悟しておかなくちゃいけないぞ。父上のことだ」

「父上？」

「あの人は、試さずにはいられないんだ」

父の肝試し（注5）、体力試しのことだった。光國はうなずいた。正直、不安には思わなかった。それよりも兄が父を「あの人」と呼んだことが大人っぽくて驚いた。ひどく恰好（かっこう）良く、頼もしかった。自分にはこの兄がいる。その事実が勇気を与えてくれるなどとは、それまで考えたこともなかった。

「おれは大丈夫」

E同じように真面目な顔をしてみせながら告げた。

「頑張れ、子龍（注6）」

兄は優しく微笑みながらうなずいてくれた。

（冲方丁「光圀伝」より）

（注1）長子＝長男。家名を継ぐべき子。

（注2）世子＝大名の世継ぎ。

（注3）犬人形＝兄がくれた小さな赤い犬の人形。厄除けのお守り。

（注4）二度と稽古はやらない＝兄はかつて、対抗心むき出しの稽古をする光國に対し、二度と稽古はしないと伝えていた。

（注5）肝試し、体力試し＝武士としての度胸をつけるための厳しい試練。

（注6）子龍＝光國の別名。

(1) 文章中のAむやみと背に火を付けられたような焦りとは、具体的にどのような気持ちか。次の文の□に入る言葉を、「兄」という言葉を使って**十字以内**で書きなさい。

「何としてでも、おれが世子になる。□。」という気持ち。

(2) 文章中の B に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 光國の疱瘡を治療した　イ 光國の憤りを和らげた
ウ 光國を孤独から救った　エ 光國を穏やかに諭した

(3) 文章中の C に入る、心情を表す言葉を、C より前の文章中から**三字**で**抜き出して**書きなさい。

(4) 文章中にD稽古をしようよとあるが、この言葉は光國のどのような思いから発せられた言葉か。最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 兄への謝罪や感謝といった今の自分の気持ちを、何とかして伝えなければならないという思いから。
イ 兄に対する怒りが悲しみに変わったことにより、自分がどうしてよいかわからないという思いから。
ウ 自分も兄と同じ病気を克服したことで、兄の頼もしさが理解できたことを伝えたいという思いから。
エ 自分が世子であることへの不安を消し去ってくれた兄に、親愛の気持ちを伝えたいという思いから。

(5)　文章中にE同じように真面目な顔をしてみせながら告げたとあるが、この表現から読み取れる、光國の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　兄の献身的な看病の末に命が救われたことで、生き残ろうとする力が少しずつわき上がり、兄に感謝する気持ち。

イ　兄の、父に対する思いを誤解していたことに気付いたことで、同じ父親をもつ兄弟として、兄に共感する気持ち。

ウ　兄との会話の中で頼もしさと恰好良さを感じたことで、兄こそが世子になるべきだと思い、兄を尊敬する気持ち。

エ　兄が自分を見守ってくれていると理解できたことで、自分にとって頼りになる存在として、兄を信頼する気持ち。

(6)　文章中に描かれている光國と兄の人物像の説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　光國は負けず嫌いで幼さが残る人物として、兄は温和で人間としての器が大きい人物として描かれている。

イ　光國は素直で明るく前向きな性格の人物として、兄は思慮深くて気配りができる人物として描かれている。

ウ　光國は内気な性格で冷静さを併せ持つ人物として、兄は穏やかで弟思いの優しい人物として描かれている。

エ　光國は兄思いの根が優しい人物として、兄は物静かだが自分にも他人にも厳しい人物として描かれている。

七

次の文章を読み、あとの(1)～(4)の問いに答えなさい。

小寺金七（注1）、その弟五左衛門、及び弟子二、三人も引き連れ、大阪へ勧進能（注2）に行く。金七は石橋（注3）をうつ。大阪の旅宿へ着くと、五左衛門も弟子も、朝暮に［A］をなす。金七はただ一度扇にていささか下稽古し、その余（そのほか）はただ散歩して（遊び歩いて）在宿せず。当日に至つて、石橋をようち、諸人に誉めらる。他日弟子どもこのことを言ひ出して、「B及ぶべからず」といふ。金七微笑していはく、「予が弟も何れも方も（我が弟も弟子の皆様も）、大鼓の下稽古めさるる（なさるのは）、悪しきことにてはなし。しかれどもC平生の心持ち、今少し行き届かず。稽古済みてばちを下に置かるると、最早胸中に大鼓なし。予は二六時中（一日中）、胸中に大鼓なきときあらず」といひしとかや。この語至理あり（きわめてもっともな道理がある）。芸文（注4）のこと、全くこのとおりなるぞ。

（「孔雀楼筆記」より）

（注1）小寺金七＝当時の大鼓の名手。
（注2）勧進能＝見物料をとって演ずる能。
（注3）石橋＝能の曲目。
（注4）芸文＝芸術、学問。

(1) 文章中のいはくを現代仮名づかいに改め、全てひらがなで書きなさい。

(2) 文章中の［A］に入る言葉を、文章中から**六字**で**抜き出して**書きなさい。

(3) 文章中にB及ぶべからずとあるが、弟子たちは金七についてどのように思って「及ぶべからず」と言っているのか。最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　金七は、公演直前まで指導に心を砕き、能舞台の本番を迎えている。
イ　金七は、練習をさほどしていないのに、本番で上手に大鼓を打てる。
ウ　金七は、何度も練習を重ね、万全の態勢を整えて本番に臨んでいる。
エ　金七は、宿には居着かず出歩いて、一度も練習せずに本番に臨める。

［　］

(4) 文章中にC平生（へいぜい）の心持ちとあるが、金七の考える「平生の心持ち」をまとめた次の文章の［　］に入る言葉を、**十字以内**で書きなさい。ただし、二つの［　］には同じ言葉を入れること。

大鼓が上手になるためには、常に［　］という心掛けが大切である。私は一日中、［　］。

八

下の資料は図書館に掲示したポスターです。この図書館では、もともとポスター1を掲示していましたが、ポスター2に張り替えたところ、マナーの改善が見られるようになりました。このことについて、次の〈条件〉にしたがい、〈注意事項〉を守って、あなたの考えを書きなさい。

〈条件〉

① **二段落構成**とし、**十行以内**で書くこと。

② 前段では、ポスター2がどのように工夫されているかについて、ポスター1との違いをふまえて書くこと。

③ 後段では、ポスター2で、なぜマナーが改善されたのか、あなたの考えを書くこと。

〈注意事項〉

① 氏名や題名は書かないこと。

② 原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。
ただし、～～や＝＝などの記号を用いた訂正はしないこと。

資料

ポスター1

図書館使用マナー向上委員会
食べたり飲んだりしないこと
本を乱暴に扱わないこと
館内で騒がないこと
返却期限を超えないこと

ポスター2

図書館使用マナー向上委員会
感性を味わい、知恵を栄養に
本は友だち、優しい心で
読書に夢中、学習に集中
感動をリレーしよう

（絵文字は，公益財団法人図書館振興財団が作成したもの）

〈Note〉

二〇一八年度 千葉県公立高校入試問題（前期）

一

解答

(1) エ　(2) ウ　(3) 来る年も来る年も　(4) イ

解説

聞き取るポイントをおさえられるよう、メモを取りながら聞くようにすること。

二

解答

(1) くわ(しい)　(2) いこ(い)　(3) こうせつ　(4) ざんてい

三

解答

(1) 率(いて)　(2) 険(しい)　(3) 模型　(4) 設備　(5) 油断大敵

四

解答

(1) 取り組んだことです（同意可）　(2) ウ　(3) いただきました（同意可）　(4) ア

解説

(1) 「特に心がけていたことは…」からつながっているので、文末を「～ことです」という形に直す。

(2) 文章中の「た」は、「秋の体育祭のときに…撮った写真」なので過去を表している。ア・エは「～ている」に置き換えることのできる継続の「た」、イは直前の動作や様子を表す完了の「た」である。

(3) 目上の人から何かをもらうときの、へりくだった表現。

(4)「自分で足を運び、確かめる」とあるので、物事は何度も人から伝え聞くよりも自分の目で一度見たほうがよく理解できる、という意味のことわざを選ぶ。イは、言葉に出さなくても目から感情がわかること。ウは、物事の一部分だけを見て、全体を見ていないこと。エは、他人の行動を見て、自分の行動を反省すること。

五

解答

(1) イ　(2) ニュアンスの差を考慮する　(3) 感受性　(4) Ⅰ、大幅な手抜き　Ⅱ、心の奥深くで感じ、言葉にする（14字）（同意可）　(5) エ

解説

(1)「冒頭で述べたように」とあるので、日本語は「語彙が豊富な言語」「同じ意味のことでも、さまざまな言葉や言い回しがあり…いろいろなことが想像できるような仕組みになっている」ことや、「自分自身」を指す言葉を例に「多様な言葉を見聞きしながら…ニュアンスを感じて、言葉以上のものを推理したり想像したりしている」と述べていることに着目する。

(2) 女子高生の例と「丁寧に言い回しを比べて」みたあと、「つまり…なくなってしまったのである」とまとめている。

(3)「若い人と映画を見た」ときのこと、「四十代の私の友人」が本を返してくれたときのこと、また「自分のこと」を例に、「日本語の語彙が減少してきているという事実は…いかに鈍くなってきたかを表している」と述べていることをふまえて探す。

(4) Ⅰ、「『よかった』『面白かった』で、すべてを片づけ、それ以上の掘り下げをしない」という最近の傾向を、「私たちはつまり…して生活している」と言い換えている。Ⅱ、筆者が、日本語の「語彙」の減少を憂えていることをふまえて、「私たち自身が心の中に手を突っ込んで…自分を鍛え」るという比喩から考える。また、一緒に映画を見た「若い人」に感想を尋ねて、「単に表面的に『よかった』とするだけで…言語化することができないよう」だと感じたり、自分のことに置きかえて「私はその感動を…言語化しているだろうか」と考えたりしていることにも着目する。

(5)「日本語の『語彙』がとても減ってきている」ことについて、「怒られる」「よかった」「面白かった」という言葉や、「若い人」「四十代の私の友人」「自分のこと」などを例に、語彙力や感性は「結局、私たち自身が…自分を鍛えない限り、手に入らないし身につかないものだ」と述べている。

六

解答

⑴兄には負けられない（同意可）　⑵ウ　⑶素直に　⑷ア　⑸エ　⑹ア

解説

⑴光國が「兄に強い対抗心を抱いていた」ことや、「竹の字に負けるものか」といつも競争心を刺激されていたことに着目する。

⑵ほぼ毎日、兄が顔を見に来てくれたおかげで「病気に倒れた者の孤独をよく知っているのだ」と兄を理解できたことをおさえる。

⑶「だが兄に対して直接口にすることはなかった」とあるので、「ひどく申し訳なかった…ごめんなさい」と面と向かって謝る様子を考える。

⑷光國は兄に対して「ひどく申し訳なかった…ごめんなさい」と思いつつも、その気持ちを直接口にすることができず、その「代わりに」口にしたのが、「稽古をしようよ」という言葉であったことから考える。

⑸「自分にはこの兄がいる。その事実が勇気を与えてくれるなど…考えたこともなかった」と、兄の存在を心強く思いながら光國が返事をしていることに着目する。

⑹光國は兄に対して「負けるものか」という気持ちを抱き、「申し訳なかった」「ごめんなさい」という言葉を「兄に対して直接口にすること」ができず、「どうしていいかわからなかった」と困っている。対して兄は、自分に強い対抗心を持っている弟が病気にふせっている間は「ほぼ毎日、顔を見に来て」くれ、以前にやらないと言った稽古の誘いに「元気になったらな」と応じ、「頑張れ」と優しく声をかけている。また、弟に「ひどく恰好良く、頼もし」いと感じさせる面も併せ持っている。

七

解答

⑴いわく　⑵大鼓の下稽古　⑶イ　⑷大鼓のことを忘れない（同意可）

解説

⑴語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

⑵金七が「予が弟も何れも方も」していたこととして述べている。「予が弟」は五左衛門のこと、「何れも方」は弟子たちのこと。

(3)「朝暮」に練習した者たちと違い、金七は「ただ一度」稽古をしただけで、当日に「石橋」を見事に打ち、「諸人」から賞賛されたことに着目する。

(4)金七が自分の心持ちについて、「予は二六時中、胸中に大鼓なきときあらず」と述べていることに注目。

口語訳

大鼓の名手である小寺金七が、弟である五左衛門、および弟子二、三人を引き連れて、大阪へ勧進能に行った。金七は石橋という曲目を打つことになった。大阪の宿へ着くと、五左衛門も弟子達も、朝から晩まで大鼓の稽古に励んだ。金七は一度だけ扇でほんの少し稽古をしただけで、そのほかは遊び歩いてばかりで宿にいなかった。演奏の当日になって、(金七は)石橋を素晴らしく打ち、多くの人々から誉められた。後日弟子達はこのことについて、「とても及ばない」と言った。金七が微笑んで言ったことには、「我が弟弟子の皆様も、大鼓の稽古をなさるのは、悪いことではない。けれども普段の心持ちとして、今ひとつ足りない部分がある。稽古を終えてばちを下に置かれると、もう心の中に大鼓のことは無くなってしまう。私は一日中、心の中に大鼓のことが無い時は無い」ということだった。この言い分にはきわめてもっともな道理があり、芸術や学問においては、全くこのとおりである。

八

解答

(例)

ポスター1は、図書館における禁止事項をそのまま列挙したものであるが、ポスター2は、図書館利用者の本来あるべき姿や、読書の目的とその効果などについて前向きな表現で書かれている。

ポスター2の方が、利用者にとっては押しつけられている感じがなく、心に残る言葉によって、図書館でのマナーを共感的に受け止められたことで、利用者のマナーの改善につながったと考えられる。(10行)

解説

ポスター1からポスター2へ張り替えた時に修正された点を挙げながら、その点が変わったことでなぜ利用者のマナーが改善されたのか、自分自身の考えを書くとよい。